

# 樹木と絵画の交差点

## 第 12 回 ～マティスとタイサンボク～

アンリ・マティスは、20 世紀フランスを代表する画家です。色を大胆に使い、「色彩の魔術師」と呼ばれました。マティスは子供のような自由な感性で人物やたくさんの樹木・植物を描きました。樹木はマティスの



絵画に大きなインスピレーションをもたらしています。マティスの描いたさまざまな樹木を見ていきましょう。

### アンリ・マティス (1869-1954)

「私が夢見ているのは、精神を安定させるような芸術、肉体の疲れを癒す安楽な肘掛け椅子のようなものです」と語った。フランスの国民的画家。

「ダンス I」(部分) (1909 年)

ニューヨーク近代美術館蔵

## 色彩の冒険

若き日のマティスは法律家志望でしたが、虫垂炎の療養中に絵を描きはじめたことをきっかけに画家を目指すようになります。折しも印象派は終焉の途をたどっており、マティスはそれに代わる新しい絵画表現への模索を始めました。絵画で生命力を表現するには「色彩」を強調すべき、という理念から、色彩を大胆に使っていきます。それと並行してルーブル美術館での巨匠の模写を通して古典のアラベスク模様や曲線の美しさを発見したマティスは、明るい色彩と線描を画面上で調和させようとしていきます。



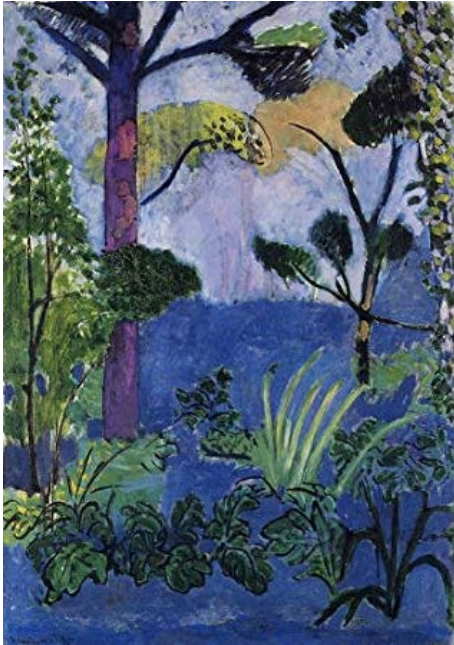
左図：豪華、静寂、逸楽 (1904 年)

オルセー美術館蔵

※右図は「松の習作」(1904 年)

新印象派 (点描主義) の手法を使って描かれた初期の大作。この絵の大胆さが議論的になり、<sup>フォービズム</sup>「野獣派」と揶揄されましたが、マティスはこの作品をきっかけに自由な色彩を探求していきます。「水辺に女性ヌード」のモチーフは、マティスが所有していたセザンヌの作品「3 人の浴女」が発想の源になっているようです。画面右の逆光のマツの木が、この絵の重要な構成要素になっています。右図はこの絵の元になった松の習作です。

モロッコ旅行に出かけた40代のマティスは、2か月間のタンジール滞在中に、強烈な日差しや亜熱帯地域の樹木・植物にすっかり心を奪われました。帰国後、旅の思い出をたどった作品を多数制作します。モロッコで経験した光と影に触発されて色彩は解放され、画面には美しいブルーが充満していきます。植物をモチーフにした作品は今までより自由に、より即興的な画面になっていきました。植物の有機的なかたちにインスピレーションを受け、マティスは伸び伸びと創造力を発揮していきます。



**アカンサス (モロッコ風景)**  
(1912年)  
ストックホルム近代美術館蔵

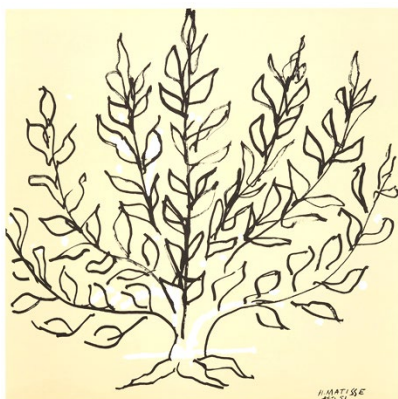
地中海地域特有のひんやりとした日影が、ブルー、ピンクなどニュアンスに富んだ色彩で表現されています。マティスはモロッコ滞在について手紙で、「見上げるような大樹、そして下ばえの豊かなアカンサスに私の心は高揚した」と語っています。アカンサスは地中海原産で、モロッコにも群生する場所があったものと思われる。マティスはアカンサスのモチーフを気に入り、晩年の切り絵の主題にも再び取り上げています 注\*。



**カスバの門** (1912年)  
プーシキン美術館蔵

## “私は樹と似ているものを創造せねばならない”

色彩と同じくらい線描(デッサン)を重要視したマティスは、頻繁にクロッキーをしました。“樹木の素描シリーズ”では庭に植えていたプラタナスなどから受けたインスピレーションをマティスの線に変換して即興的に描いています。まるで子供が描いたようなのびのびした線ですね。マティスはこう語っています。



**樹木の素描シリーズ「プラタナス」「低木」**(ともに1951年)

“葉を一枚一枚素描する方法ではなく、自分と樹を一体化させて自分の感動を解放させる。私は樹と似ているものを創造せねばならない”。モチーフをそのままそっくり描くということではないマティス独特の哲学が窺われます。

どこことなく人間に似ている形態です。子供が描いたようなおおらかな線ですが、この素描は「マティスが樹木を描いた」というより「マティスの線が樹木になった」ような逆転を感じます。実際の樹木の構造の通りではなく、マティスの感性を通して樹木のかたちが再構成されているためでしょう。



## 植物園のようなアトリエ

第二次世界大戦中の1941年、マティスは大腸の大手術をして、奇跡的に回復しました。手術の後遺症を抱えながらベッドの上で制作活動を始めます。南仏ニースのホテルの一室のアトリエには大きな観葉植物が持ち込まれました。テーブルにはたくさんの花を飾り、好きな鳥を飼い、まるで植物園のようだったと言われます。その頃はドイツ軍によるフランス侵攻や連合軍による空爆があり、レジスタンス活動に加わっていた妻と娘がドイツ軍に逮捕されるなど、マティスの家族にとって厳しい時期でした。それにも関わらずマティスは南仏に留まってのびやかな絵を描き続けました。ゆるぎない強い意志を感じずにはいられません。

「マグノリアのある静物」はそんな時期に描かれた作品です。タイサンボク(=マグノリア)の花は大ぶりで葉もしっかりしており、いかにも“マティス好み”に感じます。タイサンボクは“ゲラン”や“ジバンシー”などの香水の原料にも使われているそうで、病身のマティスも花の香りに癒されたのではないのでしょうか。楽園のようなアトリエで好きなモチーフに囲まれ、マティスは亡くなる間際まで自らの絵画を深め続けました。



マグノリアのある静物

(1941年)

ポンピドゥーセンター・  
国立近代美術館蔵

マティスの個性とタイサンボクの華やかさが響きあった、シンプルで気持ちの良い作品です。簡単に描いたように見えますが、実際は熟考されています。この作品の制作過程を撮影した写真が残されていて、それを見ると何度も絵をつぶして描き直しをしていることが分かります。右下の貝殻は簡略化されていますが、位置や描写が3度も変わっていて、より良い効果を探っています(最初の貝殻の表現はもっと描写的です)。花びらの白には少量の青が混じっていて、それによって背景の赤との対比で中心の白がひとときわ輝いて見えます。マティスのお気に入り作品で、何年も手元に置いていたと言われています。

## タイサンボクについて



タイサンボク

撮影場所：新宿御苑（東京都新宿区）

タイサンボク (*Magnolia grandiflora*) はモクレン科モクレン属の常緑高木です。原産はアメリカ、大木に 20-30 c mの巨大な純白の花をつけ、甘い香りがします。日本では「泰山木」（泰山=中国の山の名前）と名前をつけられていますが、実はアメリカにゆかりの深い樹木なのです。

ワシントンのホワイトハウスの西側に、樹齢 200 年ほどのタイサンボクが生育していました。「ジャクソン・マグノリア」の名前で親しまれたその木は、第 7 代大統領アンドリュー・ジャクソンが 1828 年ごろにテネシー州の農園から移植したものといわれています。米 20 ドル札の裏側に「ジャクソン・マグノリア」が印刷されていて、アメリカ人にとっては親しみ深い木でしたが、残念ながら一昨年、倒伏リスク回避のために伐採されました。

「ジャクソン・マグノリア」の根元には大きな貫通開口空洞がありました。大統領がヘリコプターで敷地内から発着する際に猛烈な風圧が起こるため

に、樹体の倒伏の心配があったようです。数十年にわたる保存の取組みがありましたが、米国国立樹木園の診断結果により、2018 年 1 月に伐採されました。今はオリジナルの樹木の子孫の木が同じ場所に植えられ、引き続きホワイトハウスの歴史を見守っています。



米国ホワイトハウス

伐採前の「ジャクソン・マグノリア」（左側の樹木）

※注：

**アンリ・マティス「アカンサス」(1953年)** バーゼル市立美術館蔵

後年マティスが最後にたどり着いた「切り絵」の技法で制作された。3.11×3.5m と、とても大きい作品。



《引用文献》

「マティス 画家のノート」(新装版) 二見史郎訳 みすず書房 2018年

《参考資料》

「マティス展 Process/Variation」展覧会カタログ 国立西洋美術館 2004年

「マティス-色彩の交響楽」グザヴィエ・ジラル著 高階秀爾監修 田辺希久子訳 創元社  
(「知の再発見」双書 47) 1995年

「図説 日本の樹木」 鈴木和夫・福田健二編著 朝倉書店 2012年

「樹木医が教える緑化樹木辞典」 矢口行雄監修 誠文堂新光社 2009年

《参考 URL》

「2百年の歴史誇る木を伐採へ、安全性懸念で ホワイトハウス」CNN ホームページ (2017.12.28の記事)  
<https://www.cnn.co.jp/fringe/35112626.html> (参照 2022-7-16)